ホワイト

嘘をつく子は日暮れの　別れの時の居場所がわからない　遊びつかれた言葉と
空気のぬけたゴムマリかかえて　ミルクを飲んでも同じでしょうか
甘いミルクを飲んでも白いだけです。

傷のない子は夜道で　足をふみだすリズムがわからない　暗いあぜ道おどり場
怪我を恐れてお家へ戻れない　灯りをつけても同じでしょうか
強い灯りをつけても白いだけです

夏の日ざしに麦わら　夢のない子が遊びに出かけた　水も陽気な川面に　ゲーム
のゴールに向かう笹舟　風向きしだいで変わるでしょうか
どんな風向きだろうと同じ事です

井上陽水のアルバム「ホワイト」の中の「ホワイト」。陽水の詩は一口にシュールといわれますが、脈絡の言葉の繋がりの中に遠い昔に誘われるような不思議な世界があって、この曲は短いけれど好きな曲です。
嘘をつく子と、傷のない子と、夢のない子が登場しますが、もう随分昔の曲で、いったいこの子たちは大人になれたのでしょうか。それともまだ子供のままで、「どこでもない場所」と「いつでもない時間」の中でまだ遊んでいるのでしょうか――。

（誰の絵かしらないけれど――）